

2018年12月9日（日）「枯れたいちじくの木 ～その対象は～」

マタイ 21:18-22（その1）

18 翌朝、イエスは都に帰る途中、空腹を覚えられた。19 道ばたにいちじくの木が見えたので、近づいて行かれたが、葉のほかは何もないのに気づかれた。それで、イエスはその木に「おまえの実は、もういつまでも、ならないように」と言われた。すると、たちまちいちじくの木は枯れた。20 弟子たちは、これを見て、驚いて言った。「どうして、こうすぐにいちじくの木が枯れたのでしょうか。」21 イエスは答えて言われた。「まことに、あなたがたに告げます。もし、あなたがたが、信仰を持ち、疑うことがなければ、いちじくの木になされたようなことができるだけでなく、たとえ、この山に向かって、『動いて、海に入れ』と言っても、そのとおりになります。22 あなたがたが信じて祈り求めるものなら、何でも与えられます。」

【序論】

今日は主イエスがいちじくの木を枯らすというストーリーを見てまいります。前回の宮清めに引き続き、あまり穏やかでない話です。意図的に植物を枯らすというのは、正直なところ気持ちの良い話ではありません。

私たちの生活の中でも、植物が枯れるという出来事は実は割と身近に起きることであり、静かに命が失われていく空虚感を味わい知る時ではないでしょうか。大切に育ててきた観葉植物が枯れてしまうとか、あるいはペットの死も、一つの命との別れです。

主イエスが言葉でもって呪うことにより、一本のいちじくの木を枯らされたことは、「命を与える方」とは思えない破壊的な行為であり、読者には不可解な行動に映るものです。しかし、マタイもマルコもこの記事を記録しているところには、やはり何らかの重要性があるのでしょうか。今日は一緒にこの出来事の意味を探っていきたいと思います。

【本論】

本論1. イスラエルを象徴するいちじくの木

^{よくちよう}翌朝、イエスは都に帰る途中、空腹を覚えられた。道ばたにいちじくの木が見えたので、近づいて行かれたが、葉のほかは何もないのに気づかれた。（21:18-19a）
都に入ってから主イエスの拠点はエルサレムであり、夜休む時にはベタニヤへ移動さ

れたと思われます。さりげなく使われている「帰る」(ἐπανάγω)という言葉には、そういうニュアンスが含まれている。そして、道中空腹を覚えたので、その辺に何か食べられるものはないかと見回されました。

「いちじく」は果実を食べることはあっても、木を見ることはあまりないでしょう。ヤツデに似た大きな葉を繁らせませす。漢字では「無花果」と書きますが、これは中に無数の白く小さな花がつくけれど、外からは見えないからだそうです。通常、冬には葉っぱが落ち、春になると繁り、6月頃になると早生りの実が生り始めます。そして、8～9月にかけて第二の収穫ができるそうです。主イエスが過越の祭のためエルサレムに行かれた時期が3月末から4月初めだったとしますと、まだ実が生っていなかったのはむしろ当然のことなのです。マルコは敢えて「いちじくのなる季節ではなかったからである」(11:13)と説明を入れています。それなら、主イエスが「実がないじゃないか!」と怒るのはむしろ理不尽であり、逆恨みも甚しいと言われるかも知れません。しかしながら、この奇跡はそういう意味でなされたのではなく、弟子たちに何かを教えるための視覚的のパラブルだと思われるのです。



「いちじくの木」は「ぶどうの木」と並んで旧約聖書で繰り返しイスラエルの象徴として登場します。

- ・ わたしはイスラエルを、荒野のぶどうのように見、あなたがたの先祖を、いちじくの木の初なる実のように見ていた。(ホセア 9:10)
 - ・ 主は彼らのぶどうの木と、いちじくの木を打ち、彼らの国の木を砕かれた。(詩篇 105:33)
- この他にも、エレミヤ 24:1-8 は典型的です。今日の箇所でもたまたま出てくるいちじくの木は、何か特別な木だった訳ではなく、たまたま道端に生えていたに過ぎません。しかし、主はその木に「イスラエル」という意味を置かれたのです。木に近づく。即ち、それは神の子がイスラエルに来るということ。なぜこの記事がエルサレム入城、宮清めに続いて出てくるかという、主イエスがイスラエルの中心地にまさに来ておられることを表すためです。因みに、マルコは面白い描き方をしています。いちじくの木を枯らす奇跡は瞬時に起きたのではなく、呪いの宣言をしてからもう一日経って同じ場所を通った時に枯れているのを発見したというのです。そして、その出来事の中に宮清めが挟まれている。つまり、マルコは主イエスがいちじくの木を呪うことと、神殿を肅清されることとを関連づけて描こうとしているのです。それに対し、マタイは瞬時にそのことが起きたように描いていますが、彼はそのようにして審きがたちまち起きたこと(主イエスが審き主であること)を強調しています。

本論 2. いちじくの木を呪う第一の意味

それで、イエスはその木に「おまえの実は、もういつまでも、ならないように」と言われた。
すると、たちまちいちじくの木は枯れた。(21:19b)

この呪いの言葉は、第一に内実なきイスラエル宗教に向けられていると言えるでしょう。宮清めに表されているように、神殿はマーケットと化し、神を礼拝するという本質が抜け落ち、異邦人の庭が商売のスペースとなっている。主なる神様が全世界の神であるならば、異邦人の礼拝場所は確保されていなければならなかった。

神殿とは全イスラエルの縮図であり、宗教の中心が腐敗していれば、国民全体もまた腐敗していたと言えましょう。内実がない。つまり、悔い改めがない、愛がない、御霊の実がない、神との真の交わりがない。葉ばかり繁っている。つまり、経済至上主義が蔓延り、儀式は麗々しく行なわれているが、倫理は崩壊している。律法は表面だけを行なう道が教えられ、本質が損なわれている。これは何も主イエスが来られた時代だけの問題ではありません。旧約のイスラエルは常に宗教の形骸化の危機に晒されてきた。

あなたは、彼らに言え。主はこう仰せられる。「倒れたら、起き上がらないのだろうか。背信者となったら、悔い改めないのだろうか。なぜ、この民エルサレムは、背信者となり、背信を続けているのか。彼らは欺きにすがりつき、帰って来ようとしな。わたしは注意して聞いたが、彼らは正しくないことを語り、『私はなんということをしたのか』と言って、自分の悪行を悔いる者は、ひとりもない。彼らはみな、戦いに突入する馬のように、自分の走路に走り去る。空のこうのとりの、自分の季節を知っており、山鳩、つばめ、つるも、自分の帰る時を守るのに、わたしの民は主の定めを知らない。どうして、あなたがたは、『私たちは知恵ある者だ。私たちには主の律法がある』と言えようか。確かにそうだが、書記たちの偽りの筆が、これを偽りにしてしまっている。知恵ある者たちは恥を見、驚きあわてて、捕らえられる。見よ。主のことばを退けたからには、彼らに何の知恵があろう。それゆえ、わたしは彼らの妻を他人に与え、彼らの畑を侵略者に与える。なぜなら、身分の低い者から高い者まで、みな利得をむさぼり、預言者から祭司に至るまで、みな偽りを行っているからだ。彼らは、わたしの民の娘の傷を手軽にいやし、平安がないのに、『平安だ、平安だ』と言っている。彼らは忌みきらうべきことをして、恥を見ただろうか。彼らは少しも恥じず、恥じることも知らない。だから、彼らは、倒れる者の中に倒れ、彼らの刑罰の時、よろめき倒れる」と主は仰せられる。「わたしは彼らを、刈り入れたい。--主の御告げ--しかし、ぶどうの木には、ぶどうがなく、いちじくの木には、いちじくがなく、葉はしおれている。わたしはそれをなるがままにする。」(エレミヤ8:4-13)

主イエスの呪いの言葉の背後には、エレミヤ 8:13 の聖句があるでしょう。民はいつで

も墮落してきた。宗教の本質が見えなくなった。主が忌み嫌われることをしていながら、定期的な宗教儀礼は行ない続ける。犠牲はささげ続ける。これは私たちへの警告としても響いてきます。教会では本当に福音が宣べ伝えられているか。それに生きているか。活動は健全であるか。祈りは真実であるか。信徒の交わりに赦しと愛はあるか。毎週の礼拝は形式だけのものとなっていないか。私はこのようなことを常に問われています。

私たち個人の生活をも顧みてみましょう。クリスチャンは日々聖書を読み、祈るべき存在です。祈りは私たちにとって呼吸のようなもの。しかし、その日々の宗教生活でさえ、瞬く間に実のないものとなり得るのです。確かに今朝も聖書を読んだかも知れない。しかし、読んだこと自体に満足をしてはいないか。今日も隣人のために祈ったかも知れない。しかし、通り一辺倒の決まりきった「呪文」となっていないか。私たちの真実の言葉を主は求めておられます。祈りは具体的であるほど良い。御言葉はただ読むのではなく、その日私たちが出会うすべての人のしもべとして生きるための使信となるべきものです。神に対するへりくだった心、隣人への感謝と愛が溢れるように、御言葉の一字一句に耳を傾けるのです。私は最近、「有難う」という言葉の本来の意味、「出会う一人一人の存在が私にとって有り難いものなんだ」という思いを噛み締めながら生きるようになりました。

本論3. いちじくの木を呪う第二の意味

さて、いちじくの木に対する呪いの対象は、第一に内実なき宗教を形成しているイスラエルと捉えてきました。しかし、この呪いの言葉はもう一つの隠された対象にも向けられている。それは、意外に思われるかも知れませんが、主イエスご自身なのです。過越の祭全体の文脈でこの記事を読むならば、真に呪われる存在となるのは主イエスであることが分かってくる。イエスを憎む宗教指導者たちは、イエスの処刑方法をあくまでも十字架刑にこだわります。それは、十字架には「呪い」の意味があるからでしょう。

キリストは、私たちのためにのろわれたものとなって、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。なぜなら、「木にかけられる者はすべてののろわれたものである」と書いてあるからです。(ガラテヤ3:13)

主イエスはイスラエルの民によって、またローマ帝国によって、呪いの十字架に架けられました。これは一見、「この世」が策略をめぐらし、実行した呪いの業に見えます。確かにそうとも言える。しかし、その呪いを主導していたのは、実は主イエスご自身だったのです。なぜなら、主はいちじくの木とご自分の十字架とを重ね合わせるようにして、呪いの言葉を投げかけられたからです。つまり、ここには「私はこれから全世界の

民のために呪われよう」「私は私を呪う」という宣言があるのです。なぜそんなことをするのか。それは、本来「この世」が受けるべき呪い（神の審き）を一身に引き受けるためです。神の審きは直ちにイエスの上を下る。マタイが繰り返し「すると、たちまちいちじくの木は枯れた」「どうして、こうすぐにいちじくの木が枯れたのでしょうか」と述べているのは、審きの迅速性を言い表すためです。新改訳では「たちまち」「すぐに」と訳し分けられていますが、実際には「παραχρήμα」という同じ言葉が使われています。

主イエスは「枯れる」者となられる。命の君が命を失う。それは何のためであるか。私たちに命を与えるためなのです。私たちが神の呪いを受けないように、身代わりに刑罰を引き受けてくださった。私たちはイスラエルと同様、どうしても実のない生き方をしてしまう存在です。私たちの宗教はいつでも生き生きとしたものであるとは言い難いのではないのでしょうか。律法主義・形式主義にとかく陥り易い。神に喜ばれないことを行なっているながら、何事もなかったかのように礼拝に集うことができしてしまう。神様との関係が悪くなっていることにさえ気づかない。そういう私たちにもエレミヤの厳しいメッセージは向けられているはずです。しかし、主はその審きの宣言を私たちにではなく、ご自分に向けて投げつけてくださいました。これが「いちじくの木のかんげい」に隠された第二の意味なのです。このことを感謝をもって受け留めたい。主イエスを信じる人は、もはや神の呪いを受けないのですから。

【結論】

最後に、ヨハネ福音書に出てくる「木」にまつわる表現に触れておきましょう。

わたしはまことのぶどうの木であり、わたしの父は農夫です。わたしの枝で実を結ばないものはみな、父がそれを取り除き、実を結ぶものはみな、もっと多く実を結ぶために、刈り込みをなさいます。《中略》 わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。（ヨハネ15:1-5）

主イエスとの繋がりを持たない「この世」は神の前に命なき存在です。しかし、主イエスは繋がりを求めて来られました。そして、この地に十字架を立てられた。ぶどうの木／無花果の木として主は植えられたのです。この方はひとたび呪いを受けましたが、全世界の祝福の基となって甦りました。この方と繋がる人は必ず多くの実を結びます。

【祈り】

この世とのつながりを求め、お生まれくださった主イエス・キリストの父なる神様。無花果の木を枯らされた主の姿は、私たちの罪が審かれる時を思い出させます。私たちは世の終わりの審判を恐れながら生きています。しかし、主が下された審きは、何とご自分に向けられていたことを知り、言葉ありません。そして、それが私たちの身代わりとなって神の呪いを受けるためのものであったとは。私たちは不思議なる主の御業を覚え、賛美いたします。そして、命の君に結び合わされ、豊かな実を結ぶ者となりたく願います。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
腐敗したイスラエルの宗教を嘆き、真の交わりを求め給うた、父なる神の愛。
ご自分をいちじくの木になぞらえ、呪いをもって枯らすことを通し、我らの罪の呪いを一身に引き受け給うた、主イエス・キリストの恵み。
ぶどうの木なるキリストとつながらせ、豊かな実を結ばせ給う、聖霊の親しき交わりが、あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。